

# 大学との連携による地域の歴史学習の実践について

## ～国府の学習を通して～

柴崎 功士 藻利 国恵

本校及びその周辺は、奈良時代に下総国府が置かれていた場所であり、近年の発掘調査により、国府の遺構や当時使われていた様々な物品が出土している。本校に隣接する和洋女子大学内にある文化資料館には、調査の様子の写真及び貴重な出土品やそのレプリカが展示され、一般にも開放されている。本校中学部ではこの地理的条件や、隣接する大学に資料が豊富にあるという恵まれた環境を活かし、和洋女子大学と連携して地域の歴史についての学習に取り組んできた。今年度の取り組みでは国府の学習をきっかけに、当時の国府台の地形や地域の伝承などにも範囲を広げながら、各自が自分の選んだテーマについて学習を深めていった。調べ学習のテーマは生徒一人一人が、授業や見学の中からより強く興味を持ったものを選んだ。

【キーワード】 地域学習 調べ学習 大学との連携 発表

### 1 はじめに

本校やその周辺は下総国府が置かれていた場所に位置する(図1・2)。図2にある太日川は現在の江戸川のことであり、現在も地名として残っている「真間」とは「崖」を意味する。奈良時代には崖の下は「真間の入り江」と呼ばれる入江になっていた。また、本校周辺は国府跡のほか、古墳や城跡なども点在している。本校中学部では、この恵まれた環境を活かし、地域の歴史について学びながら、生徒の地域や歴史への興味・関心を高め、学習事項に対する理解を深化させる実践に取り組んできた。その一つとして平成15年度より継続して実践しているのが、隣接する和洋女子大学との連携による下総国府の学習である。本学習は、学習指導要領に示された「身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味・関心を高め、様々な資料を活用して歴史的な事象を多面的・多角的に考察し公平に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる」実践である。学年ごとに取り組みの内容は若干異なるものの、継続して取り組んできた中で、和洋女子大学資料館の見学及び大学の担当者による国府に関する

講義の受講に始まり、調べ学習を経て発表という流れが定まってきた。今回の発表では平成24年度入学の第一学年14名の取り組みに焦点を当て、学習の経緯及び成果について報告する。

### 本校の立地



図1 現在の国府台周辺の地図。図2と方角を合わせるため南北を反転して提示。四角で囲った国府跡に本校及び和洋女子大学が位置する。

## 奈良時代の国府台

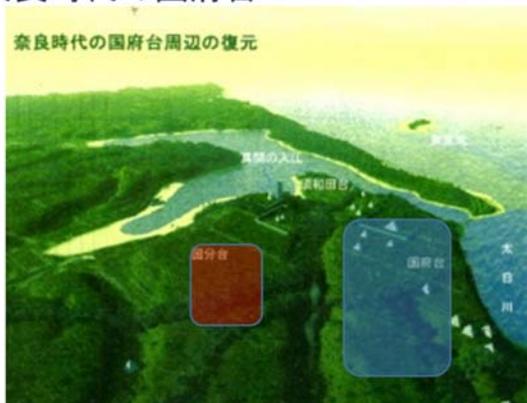


図2 大きい四角が国府。小さい四角が国分寺・国分尼寺。太日川（ふとひがわ）は現在の江戸川。

### 2 生徒の実態

対象生徒は平成24年度に入学した本校中学部一年生（2学級計14名）である。通常は学級ごとに一斉指導による授業を行っている。聴覚の活用も積極的に行われており、普段のコミュニケーション、授業中の意見交換や発言とともに活発な学年であると思われる。学年内の学力の開きは比較的大きく、教科の学習において個別での対応が必要になるケースも見られるが、社会科に関しては一斉指導による授業を行っている。総じて学習への取り組みの姿勢は良好であり、楽しみながら授業に参加することができる学年である。今回の実践においては、元々歴史に対する興味関心の高い生徒が多いことや、市川、松戸地区に居住する生徒が多いこともあって、学習開始当初から大変意欲的に取り組むことができた。自分たちが生まれ育った町についてもっと知りたいという探求心や、慣れ親しんでいるはずの地元で自分の知らない歴史が隠されていたという驚きが生徒達の興味関心を高め、それが学習の成果に反映されたと考えられる。

### 3 学習の流れ

本実践は、(1)和洋女子大学内にある文化資料館の見学及び国府・国府台についての学習(2)各自の研究テーマ設定及び調べ学習(3)大学側担当者

に個別で質問する学習(4)同級生・保護者対象のプレゼンテーション、という四段階で行った。学習の最後にアンケートをとり、生徒の感想や自己評価について集計を行い、取り組み結果の考察の一助とした。大学側からは本実践を通じて同一の担当教員に協力していただいた。連携した取り組みの実践に先立ち、中学部卒業生によって学習作成された地域の歴史に関する資料の視聴や、近隣の史跡などの見学(写真1・2)を行い、生徒の意識を高めるよう配慮した。見学を行った明戸古墳、法皇塚古墳(明戸古墳は里見公園内に位置する古墳時代後期の古墳。明戸古墳のある里見公園は南総里見八犬伝の舞台となった里見氏の居城跡でもある。法皇塚古墳は東京医科歯科大のキャンパス内にある6世紀頃につくられた前方後円墳である。)は、年代は奈良時代からさらに遡るが、地域の歴史に興味を持ってもらいたいと考え、見学を実施した。



写真1 法皇塚古墳の見学



写真2 明戸古墳の見学

#### 4 実践の様子

##### (1) 文化資料館見学及び国府・国府台についての学習

まず、和洋女子大学のキャンパス内で実施した発掘調査の様子の写真やイラストなどを見ながら国府台や国分の地名の由来となった下総国府や下総国分寺についての授業を受けた(写真3)。国府台の地名の由来については、国府に由来するという説以外に、ヤマトタケルとコウノトリのエピソードにちなんだものであるという説も紹介され、「鴻」の字を用いた「鴻ノ台」という表記がされることもあるのを知った。その上で、全国各地に国府に由来した地名が散在することの説明を受け、ここ国府台の地名も国府に由来すると考えるのが妥当であることを学んだ。そのほか国府内の建物の配置や、役人や庶民の生活や仕事の様子、装束などについてや、朝廷による下総の国のランク付けなどについて詳しく説明を受けた。この授業の講師は和洋女子大学教員が担当し、本校教員は補助的な役割で参加するチームティーチング形式をとった。授業終了後、資料館展示室で発

掘調査の出土資料の観察を行った。資料館展示室の見学では、実際に下総国府跡から出土した土器や瓦(一部はレプリカ)を手に取り、手触りや重さ、匂いなどを体感するという貴重な体験をさせていただいた(写真4)。土器の軽さや、瓦の重さに驚く生徒も多かった。実際に見たり触れたりすることで、匂いや手触り、形・色などからどんな風に使われていたのか、例えば焦げているから火にかけて使ったのだろうか、においが強いので食べる時に使うのには適さなかったのではないかというように、自分の五感と知識を生かして推察するという、普段の授業ではなかなかできない体験をすることができた。また、同時期に開催されていた、学芸員課程履修の学生が企画・設営した「民具といっしょー布と植物とわたしたちー」の企画展も見学させていただいた。この企画展に興味を持った生徒も多く、ここから後の調べ学習のテーマを選んだ者も複数名存在した。生徒は博物館学芸員や展示に取り組んだ大学生の解説を熱心に聞き、文化資料館での学習を楽しんでいる様子が感じられた。



写真3 和洋女子大学での授業の様子



写真4 下総国府跡地から出土した瓦を手にする

## (2) 各自の研究テーマの設定と調べ学習

文化資料館の見学で学んだことをもとに、各自が研究テーマを設定した。本学年では一人一人がテーマを設定し、調べ学習を行いそのまとめを発表することとした。研究テーマは「国府について」をはじめとして「奈良時代の人々の服装について」「宝相華文(ほうそうげもん)と七重塔」「国府台とコウノトリ」「手児奈(てこな)伝説について」など、国府や当時の国府台に関するものから「房総うちわについて」「手まりについて」など、地域の民具・民芸に関するものまで多岐に亘った。資料は本校中学部の蔵書を中心に図書を中心に調べ学習を行った。必要に応じてインターネットなども活用したが、インターネットを使用するに当たってのスキルが十分とは言えない状態で、インターネット中心の調べ学習を行うことは避けたいと考えた。インターネットを利用するためのスキルや心構えについて解説時間をとられたりするなどの弊害を避け、各自のテーマについて調べたりまとめたりすること、そして発表の仕方や表現方法などについて考え準備するという活動に集中してもらうことが優先されるとの判断からである。



## (3) 大学側担当者に個別で質問する学習

ある程度調べ学習が進んだところで、学習を深化させるため、蔵書資料やインターネットの利用では分からなかったこと、新たに生じた疑問などについて、大学側担当者に来校していただき個別で質疑応答を行う機会を設けた(写真5)。生徒はあらかじめ質問をワークシートに書き込み、その答えについて自分なりの仮説を立てた上で質疑応答に臨んだ。仮説が合っている場合もあれば、全く違った答が得られる場合もあったが、仮説を立てるというプロセスを経ることで、生徒は正解を導き出した喜びや、予想だにできなかった事実への驚きを持つことが出来、より有意義な時間になったのではないかと考えられる。

民具展から学習テーマを選んだ生徒に関しては、和洋女子大学担当者の専門をはずれた質問をした者もいたが、非常に丁寧に対応して頂き、歴史上の一般論や類似するケースなどから類推し導き出せる結論として回答をして頂いた。



写真5 大学の担当者に質問をする様子

(4) 同級生・保護者対象のプレゼンテーション

学習のまとめとして、各自の研究成果をスライドにまとめ、同級生・保護者を対象としたプレゼンテーションを行った(写真6)。当日は和洋女子大学の担当者にも参加していただき助言をお願いした。生徒の発表や取り組みの姿勢について大変高く評価をして頂いた。プレゼンテーションは電子情報ボードを活用し、資料は電子ファイル化した。プレゼンテーション資料作成に当たっては、PCの活用よりも発表そのものに重点を置いたこと、一年生段階ということもありソフトの操作に手感が予想されたことなどから、PCソフトを用いた作画の手法をとらず、手書きしたものを読み取り形式をとった(写真7の①②③)。主に国府や国分寺

に関する内容について調べた者のグループ、貴族の文化や生活に関して調べた者のグループ、千葉県や市川市の歴史や伝承に関する内容を調べた者のグループといったように発表のテーマが近い者ごとにグループを作り、似た傾向のテーマの発表が続くようにグループ順の発表とした。生徒は緊張した面持ちだったが、堂々と自信を持ってプレゼンテーションを行うことができた。自分で用意したスライドを提示しながら、様々なコミュニケーション方法を用いて見ている人に分かりやすく伝えようと工夫している様子が強く感じられた。保護者の評価も良好で、生徒のこれまでの成長と今後の可能性を感じている様子がうかがえた。



写真6 発表の様子

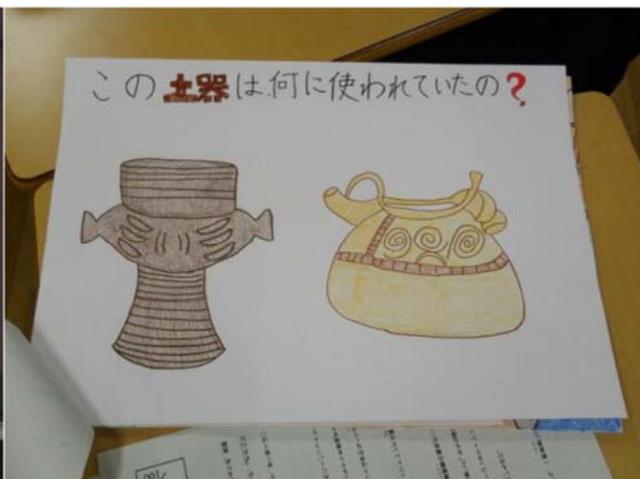


写真7 発表スライドの原画作成①



写真7 発表スライドの原画作成②

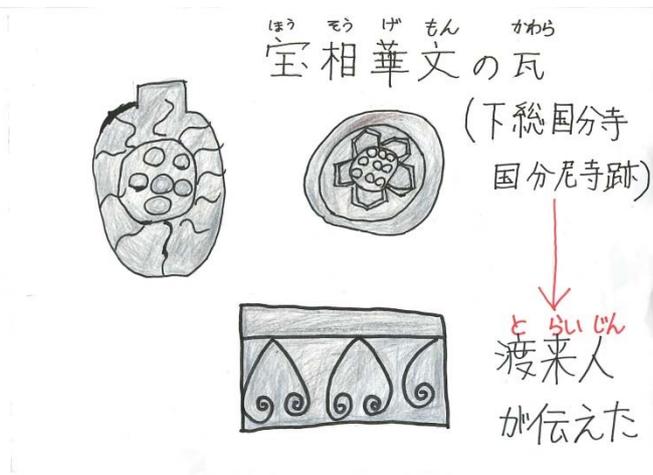


写真7 発表スライドの原画作成③

## 5 成果と課題.

生徒の歴史への興味・関心は、本実践を通じて確実に高まっていることが感じられた。実物を目にする、手にするということや、専門家の意見を直接聞けるという体験は、外部機関との連携の大きなメリットであると考えられる。実際に生徒からも好意的な意見が多く聞かれ、楽しんで取り組めた様子が見えた。また、継続して取り組んでいることで、先方の本校及び本校生徒に対する理解も年々深まってきたとされており、これが、連携した学習の成果拡大、生徒の学習の深化に寄与していると考えられる。プレゼンテーションは、テーマの設定から自分自身で行い、調べ学習や資料作成に取り組むことで、自主的に学ぶ態度や、受け身にならず自ら考える姿勢が身に付いてきたと考えられる。発表を成功させたことが自信を持つことにもつながっている。プレゼンテーション資料のまとめ具合や、内容の濃さ・深さ、発表の技術などには個人差があるものの、各自が自分なりに工夫を凝らして資料作成及び発表に臨んだこと自体が大変異議のあることだったと思う。

取り組みの成果や今後の発展的な取り組みのため、成果及び課題について整理したデータが必要と考え、取り組みの結果について、生徒を対象にアンケートを行った。アンケートをとった項目は、それぞれの取り組み段階に関する質問として、(1) 和洋女子大学での授業は分かりやすかったか (2) 質疑応答の授業は資料づくりに役立ったか (3) 発表はうまくできたか (4) 友達の発表はどうだったか、の4つに加え、実践全体を通じた感想として (5) 国府の学習は楽しく取り組めたか (6) また同じような学習の機会を持ちたいか、の2点、計6点である (表1参照)。アンケートは五つの選択肢から該当するものを選ばせ、さらにその理由を答えさせる形で行った。

(1) の「和洋女子大学での授業は分かりやすかったか」という質問に対しては、「分かりやすかった」・「やや分かりやすかった」と答えた生徒が85%にのぼった。逆に「分かりにくかった」、「やや分かりにくかった」と答えた生徒はいなかった。分かりや

すかった理由としては、「詳しく説明してくれたから」ということと、「画像や映像が多く使われていたから」というものが多かった。

(2) の「質疑応答の授業は資料づくりに役立ったか」という質問に対しては、「役に立った」、「やや役に立った」と答えた生徒が85%にのぼった。この質問に対してもネガティブな回答は一つもなかった。生徒にとって大変有意義な時間だったことが分かる。役に立ったと感じる理由としては、「質問したかったことを全部聞けた」、「個別に質問できたのでたくさん答えてもらえた」などがあげられていた。

(3) の「発表はよくできたか」という質問に対しては、若干反応が分かれた。うまくできなかったと答えた生徒こそいかなかったものの、「うまくできた」、「ややうまくできた」と答えた生徒は54%にとどまった。ただし、自分の発表に対する評価はやや控えめであろうことを考慮すると、「ふつう」と答えた生徒を含む9割方の生徒が自分の発表に手応えを感じていると考えても良いと思う。「ややうまくできなかった」と答えた生徒も8%存在したが、これについてはプレゼンテーション資料の出来云々よりも、「声が小さかった」、「手話を覚えていなかった」など、発表の仕方に関するものを理由としてあげていた。

(4) の「友達の発表はどうだったか」という質問に対しては、「分かりやすかった」、「やや分かりやすかった」と答えた生徒が77%にのぼった。それぞれに友達の発表にも興味を持ち真剣に聞くことができたと考えられる。「分かりにくかった」、「やや分かりにくかった」と答えた生徒はおらず、各自の発表が同級生から見てもある程度分かりやすいものになっていたことがこの結果から分かる。分かりやすかった理由としては、「絵や手話・身振りなどをうまく活用していたから」、「区切りがはっきりしていたから」、「資料の絵や文が分かりやすかったから」、「みな詳しく調べていたから」などが挙げられていた。これらの理由は (3) の発表はよくできたかという質問に対する回答の理由と共通点が見られた。

取り組み全体についての質問である (5) の「国府の学習は楽しく取り組めたか」については、「楽し

かった」、「やや楽しかった」と答えた生徒が69%にのぼった。自分が住んでいたたり学んでいたりする地域について今まで知らなかったことについて知ることが出来たことが、楽しく感じた理由として多くあげられていた。前向きな姿勢で地域の学習に臨めたことが伝わってくる結果と言えると思う。

(6)の「また同じような学習の機会を持ちたいか」については過半数の生徒が「やりたい」、「やややりたい」と答えた。理由としては、「もっと深く市川の歴史を調べたい」、「国府台以外の地域についても調べたい」といったものが多く見られた。地域やその歴史に興味を持ってもらうという意味で、一定の成果があったと考えてよいといえるだろう。しかし、その一方で「どちらともいえない」、「あまりやりたくない」と答えた生徒も半数近くいた。そのよ

うに答えた生徒は、「人前で発表することが恥ずかしかった」ということを理由としてあげており、見学や調べ学習については「楽しく取り組めた」と答えていた。

これらのアンケートの結果から考えられる成果として、地域や歴史への興味関心が高まった、自発的に学ぶ態度が身に付いてきた、伝えるための工夫ができるようになった、分かりやすい発表とは何かということに関して生徒が一定のイメージを持てるようになったなどが挙げられる。そのほかにも継続した取り組みの中で、健常者とのコミュニケーション機会を確保することができた、先輩から後輩へと学んだことを伝えていく流れができたなども成果として考えてよいと思う。

表1

アンケート結果			
(1) 和洋女子大学での授業は分かりやすかったか		(4) 友達の発表はどうだったか	
分かりやすかった	46.2%	分かりやすかった	46.2%
やや分かりやすかった	38.5%	やや分かりやすかった	30.8%
ふつう	15.4%	ふつう	23.1%
やや分かりにくかった	0.0%	やや分かりにくかった	0.0%
分かりにくかった	0.0%	分かりにくかった	0.0%
(2) 質疑応答の授業は資料づくりに役立ったか		(5) 国府の学習は楽しく取り組めたか	
役に立った	69.2%	楽しかった	46.2%
少し役に立った	15.4%	やや楽しかった	23.1%
ふつう	15.4%	普通	30.8%
あまり役に立たなかった	0.0%	あまり楽しくなかった	0.0%
役に立たなかった	0.0%	楽しくなかった	0.0%
(3) 発表はよくできたか		(6) また同じような学習の機会を持ちたいか	
うまくできた	30.8%	やりたい	38.5%
ややうまくできた	23.1%	やややりたい	15.4%
ふつう	38.5%	どちらともいえない	30.8%
やや失敗してしまった	7.7%	あまりやりたくない	15.4%
失敗してしまった	0.0%	やりたくない	0.0%

課題としては、人前で発表することへの抵抗感が拭えない生徒がいる、集めた情報の取捨選択のスキルが不足している、様々なコミュニケーション手段を活用して伝えるスキルを身につける必要があるなどが考えられ、これらは今後の取り組みの中で改善していかなければならないと考えている。

第47回全日本聾教育研究大会では、「身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味・関心を高め、様々な資料を活用して歴史的な事象を多面的・多角的に考察し公平に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる」実践としては、前半部分の興味・関心を高めるという点で確実な成果が感じられるものの、多面的・多角的に考察し、公平に判断する、という部分で物足りなさが残るというご指摘をいただいた。生徒によって差はあるものの、複数の生徒の発表が事実の確認と理解にとどまり、そこから何が推察できるか、今後の学

習をどのように発展させていくかについて踏み込めていない点は確かに今後の課題であろうと思う。

今後は、先方からのフィードバックを積極的に取り入れるなど連携の強化に努め、よりよい実践の形を探りたい。資料作成のスキル向上などと共に、学習結果についての考察や判断といった点についても取り組まなければならないと考えている。

#### 〔参考文献〕

- 1) 筑波大学附属聴覚特別支援学校中学部 (2010)  
教科指導と読み書き・ICT活用  
— 中学部における実践事例 —
- 2) 筑波大学附属聴覚特別支援学校中学部 (2012)  
学習指導の工夫とICT活用  
— 続・中学部における実践事例 —